第14回　日本医師会

赤ひげ大賞

住民に真摯に向き合い

地域で献身的な医療に取り組む医師を顕彰する第14回「日本医師会　赤ひげ大賞」（主催・日本医師会、産経新聞社、特別協賛・太陽生命保険）の表彰式が5日、東京都内で行われる。大賞を受賞した5人の医師の日々の活動と、功労賞受賞者を紹介する。

大賞受賞者（5人、順列は北から）

木村　守和	（福　島）	社会福祉法人楽寿会理事長
林　　正	（埼　玉）	大宮林医院顧問
川窪　　優	（新　潟）	高田西城病院理事長・院長
出水　　明	（大　阪）	出水クリニック理事長・院長
前川　裕子	（徳　島）	徳島県立三好病院循環器内科部長

木村守和氏（福島県いわき市）

ALS闘病の医師だから紡げる言葉

きむら・もりかず　特別養護老人ホーム「楽寿荘」（福島県いわき市）を運営する社会福祉法人楽寿会理事長。昭和34年、同市生まれ。66歳。東北大医学部卒業後、宮城厚生協会坂総合病院、国立がんセンター中央病院外科レジデントなどを経て、木村医院を継ぐ。令和5年にALS発症後は講演などを行う。

福島県いわき市で祖父の代から続く診療所を平成9年に継ぎ、地域医療や医師会活動などに取り組んできた。令和5年春ごろ、全身の筋肉が萎縮し筋力が低下する筋萎縮性側索硬化症（ALS）を発症するも、翌年末まで診療を行った。現在は難病と闘いながら、小中学校での「いのちの授業」などに取り組む。「ずっと社会に役立ちたいと思って生きてきた。無理もしたが悔いはない」。その使命感は尽きることがない。

献身的な姿勢は先代の父の背中から学んだ。「急患で呼び出され仕事にいく姿が記憶に残る。患者さんに誠実な外科医だった」と振り返る。木村医院の3代目となり、自らも日夜問わず診療に明け暮れた。

東日本大震災では被災者の診療に追われる一方、運営する特別養護老人ホームで入所者への対応に奔走。6年間務めたいわき市医師会長時代には新型コロナウイルス禍に見舞われ、パンデミック対応に尽力した。学校医や産業医も25年以上務め、「地域包括ケアの推進」をライフワークとし、医療と福祉が連携する地域社会の基盤づくりに心を砕いた。

だが、地域に尽くす医師を病が襲った。ALSは根本的な治療法がない難病で患者は国内に約1万人。病を疑ったのは令和5年8月で「ギターの弦をうまく押さえられなかった」。同年5月の講演で言葉がもつれ、6月には内視鏡操作で左手の指に違和感があったが「症状が軽く病気に気付かなかった」。

今は車いす生活を続けている。昨年3月、誤嚥を防ぐため喉頭中央部切除術を受けた。手術で声を失い、会話は入力した文字を、手術前に録音した自身の声で再生するシステムで行う。

長期療養に入り診療所は一昨年11月に休院した。しかし、ALSを患った医師の視点で講演を行うなど精力的な姿勢は健在だ。「『できること』を精いっぱいやりたい」という気持ちに変化はない。「伝えるのは医師だからこそ紡げる」メッセージだ。

「日本は人工呼吸器をつけて生きていくことは恵まれた環境。感謝して社会に貢献できるように生きていこう」と。

（文・写真　芦沢伸生）

林正氏（さいたま市）

「真心持って」誕生見届け1万人超

はやし・ただし　大宮林医院顧問。昭和7年、大宮市（現さいたま市）生まれ。93歳。33年、昭和医科大卒業後、同大産婦人科教室に入局。41年、林医院（現・大宮林医院）副院長に就任。平成元年に同院院長、24年から現職。現在は婦人科外来を中心に診療にあたる。

暖かな院内の一室で、赤ちゃんの小さな体に聴診器をあて、心音に耳を澄ませる。真剣なまなざしに、張り詰めた空気。異常がないことを確認すると、軽くうなずき、笑顔を見せた。

多くの子育てと世帯が移り住み、人口増が続くさいたま市大宮区で半世紀以上、産婦人科医として女性と子供たちの健康を見守り続けた。誕生を見届けた子供は1万人を超える。赤ひげ大賞の受賞には「今があるのは、家族やスタッフの協力のおかげ」と話す。

内科医の父が開業医として患者のために奔走する姿を見て、医学の道を志すようになった。進学した昭和医科大ではラグビー部に所属。「ハードな練習のおかげで、過酷な業務にも負けない丈夫な体を得た」と笑う。昭和41年に父の医院に産婦人科を開設し、地域に根を おろした。

やがて第2次ベビーブームを迎え、分娩対応に明け暮れた。自宅に帰って、すぐに医院へ舞い戻ることも日常茶飯事。「気が休まることはなかった」というが、「赤ちゃんが元気な産声をあげた瞬間、これまでの苦労も疲労もすっと消えていった」と目を細める。

忙しさの理由の一つが人材不足だった。産科に従事する看護師らの育成に向け、54年に埼玉産婦人科看護研修学院が設立されると、業務の傍ら教壇に。平成12～18年には学院長となり、解決に尽力した。信条は「至誠一貫」。助けを求めてやってくる人たちに「真心を持って奉仕することが医者の役目」と語る。

心に残る思い出がある。昭和55年、内乱で祖国を追われたラオス難民90人を当時の大宮市で受け入れたとき。妊婦10人の分娩対応を無償で引き受け、出産前後の健診も行った。難民の中には大宮を安住の地として、定住を決めた人もいるという。

今年で94歳。産婦人科医の長男に院長職を任せ、婦人科外来に軸足を置くが、患者に寄り添う姿勢は変わらない。親子3代で守ってきた医院は来年100周年を迎える。「産婦人科医は女性の一生に寄り添うパートナー。自分ができる奉仕を続けていきたい」と語った。

（文・三宅陽子、写真・関勝行）

松本吉郎会長（日本医師会）

連携し合い地域を支える

平成24年に創設した本賞も、今回で14回目を迎えることができました。これまで本賞の趣旨に理解を賜り、ご協力くださった関係者の皆さま方に改めて深く感謝を申し上げます。

近年、賃金や物価の上昇などにより、医療機関を取り巻く環境は一段と厳しさを増しており、私どもとしましても医療機関が地域に存続できるよう支援を政府に求めているところです。そのような中にあっても、各地域の医師たちは住民の健康を守るため、患者一人一人と一事に向き合い、それぞれが連携し合うことで面となって地域医療を支えています。

本賞は、そうした医師に光を当てるために創設したものですが、今回受賞された先生方は地域住民を思い、また、住民から信頼されている、まさに「赤ひげ先生」と呼ぶにふさわしい方々ばかりです。そのご功績に心より敬意を表するとともに、先生方が実践されている医療やまちづくりの姿を本賞を通じて広く知ってもらうことで、各地の医療環境の充実につながることを期待しております。

日本医師会は、今後も地域住民に安心して暮らしていけるよう、受賞者をはじめとした各地域で奮闘されている医師を支えることで地域医療を守り続けてまいります。

田村泰朗社長（太陽生命保険）

先生方の尽力に深い敬意

「日本医師会　赤ひげ大賞」を受賞された5氏の皆さま、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆さま、誠におめでとうございます。

地域に根差し、日々の診療を通じて人々の暮らしと命を支えてこられた先生方のご尽力に深い敬意を表します。医療環境が大きく変化する中にあっても地域住民に寄り添い続ける先生方の姿勢は、私たちに地域医療の尊さと、その継続を支える意義を改めて教えてくださっています。

当社は平成29年から「日本医師会　赤ひげ大賞」に協賛しておりますが、地域医療の最前線で奮闘される先生方の真摯な取り組みに毎年心を打たれております。

太陽生命は、社会保険制度を補完し、人々の自助自立を支えることを使命として、保険商品・サービスの提供を通じお客さまの健康増進に寄与し、健康寿命の延伸という社会的課題に向合ってまいります。

これからも、お客さま一人一人の「元気・長生き」を支えるため、商品やサービスのさらなる充実に努め、地域医療を支える皆さまと歩みを共にしていきたいと考えております。

最後になりますが、この賞がより多くの方々に広く知られ、地域医療への理解と支援の輪が一層広がることを願うとともに、当社としても引き続き支援してまいります。

「日本医師会　赤ひげ大賞」　密着して人々の健康を支える医師の功績を顕彰し、広く国民に伝えるとともに、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として平成24年に創設された。全国の都道府県医師会から推薦された候補者から、毎年1回、大賞・功労賞の受賞者を選考会で選定し表彰する。第11回から選考委員に医学生のグループが加わり、今回は京都大、京都府立医科大、徳島大の医学生が選考に加わった。

■推薦方法と推薦基準

【推薦方法】本賞受賞にふさわしいと思われる医師1人を各都道府県医師会長が推薦

【推薦基準】病を見るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員および都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く）。

公式ホームページ

3月29日　BSフジで特別番組放送

「密着！かかりつけ医たちの奮闘～第14回赤ひげ大賞受賞者～」
放送日：3月29日（日）正午～午後0：55

【主　　催】日本医師会、産経新聞社
【後　　援】厚生労働省、フジテレビ、BSフジ
【協　　力】都道府県医師会
【特別協賛】太陽生命保険

人生100歳時代。
元気に長生きしながら、自分らしく生きていく。
それは誰もが望む理想の未来。
太陽生命の保険組曲Best MYWAYは、
そんなひとりひとりの生き方を応援していきます。
あなたの人生という道に、もっともっと寄り添えるように。
太陽生命の新たな挑戦の道のりもまた、
ここから始まります。
あなたの人生にベストな安心を。
太陽生命の保険組曲Best に
新シリーズ、登場。
保険組曲 Best MY WAY

元気！長生き！　太陽生命　資料請求は 0120-264-333　資料のご請求は自動音声で24時間受付しております。　太陽生命ダイレクト　さあ、保険の新次元へ。T&D保険グループ

第14回 日本医師会

赤ひげ大賞

功労賞受賞者（20人）

杉山　茂（北海道）杉山クリニック医院長
小野瀬好良（茨　城）小野瀬医院理事長
尾形直三郎（栃　木）尾形クリニック会長
星野　仁夫（群　馬）星野医院院長
松永　平太（千　葉）松永醫院理事長・院長
中里　厚（東　京）中里医院名誉院長
森島　昭（神奈川）森島小児科内科クリニック院長
井村　優（石　川）井村内科・腎透析クリニック名誉院長
萩野　正樹（福　井）南越前町国民健康保険今庄診療所所長
長田　忠大（山　梨）長田在宅クリニック院長
林　悦三（静　岡）はやし耳鼻咽喉科医院院長
坂倉　究（三　重）坂倉ペインクリニック在宅診療所院長
伊勢村卓司（京　都）伊勢村医院院長
大下　智彦（広　島）大下クリニック理事長・院長
安本　忠道（山　口）安本医院院長
岡本　啓一（高　知）菊地産婦人科医院院長
小野　辰也（佐　賀）小野医院理事長
山下　昌洋（熊　本）山下内科医院理事長・院長
吉田　史郎（大　分）吉田医院理事長・院長
森　明人（鹿児島）森産婦人科理事長

選考委員コメント

羽毛田信吾委員（恩賜財団母子愛育会会長）　良い医療を住民に届けることも大事だが、住民とどれだけ信頼関係を築けるかということもとても重要で、それによって地域医療が成り立っているのだと今回の選考で実感した。

向井千秋委員（東京理科大特任副学長）　女性2人が大賞を受賞しうれしい。予防を含め包括的に住民の健康に寄与しているか、次世代への教育、本人も生きがいを感じて取り組んでいるかなども考慮し評価した。

檀ふみ委員（俳優）　「自分だったらどういう先生にかかりつけ医になってほしいか」を想像しながら選んだが、どの候補者も甲乙付けがたく、選ぶのは大変だった。評価を付けるのが申し訳ないような気持ちになった。

ロバート・キャンベル委員（早稲田大特命教授）　少子高齢化や過疎化の中、地域に長くとどまり従事する先生や新たな取り組みを広域に行う先生、社会課題解決に積極的な先生など、バランスのよい受賞者となった。

森光敬子委員（厚生労働省医政局長）　今回の選考も困難を極めたが、さまざまな形で地域に貢献する先生方に改めて敬意を表したい。女性や90代の先生の活躍も光り、そうした先生方を顕彰することは大変意義深い。

医学生（令和7年度）　私たちが選考に加わることは恐れ多かったが、地域医療について勉強でき、将来に生かしたいと思った。（京都大）

受賞の先生方を見て、地域医療への取り組み方が一つではないと知ることができ、貴重な機会となった。（京都府立医科大）

日々の医学の勉強に追われ、地域での医師の活動を学ぶ機会が少ないので勉強になった。受賞の先生方のようになりたい。（徳島大）

熱い使命感を胸に邁進

精神障害者の社会復帰・就労へ奮闘

川室優氏（新潟県上越市）

かわむろ・ゆう　高田西城病院理事長・院長。昭和20年、新潟県高田市（現・上越市）生まれ。80歳。45年、東京慈恵会医科大卒。同大精神神経科医長などを経て、54年に地元に戻り、現・川室記念病院、高田西城病院の院長を歴任。5法人医療福祉グループ「和・道厚生事業団」の理事長も務める。

「精神科の入院病棟が、患者にとって居心地のよい場所になってはいけない」。一人の人間として生まれたのだから、症状が安定したら地域で暮らせるよう支援したい」。この2つの信念に基づき「共生社会」という言葉が一般化するはるか前から、精神障害者の退院、就労支援に取り組んできた。偏見解消に向けた住民との交流イベントなど、診療の枠を超えた試みが評価された。

実家は新潟・高田で曾祖父から続く医師の家系。父の道隆氏は、精神疾患患者が農作業を行う農耕・園芸療法を先駆的に導入した。父の病院での幼少期の体験が人生を決める。当時、東京の大学に進学したものの心を病み、故郷に戻り入院している若者たちがいた。「卓球を教えてもらったり楽しい思い出で、患者さんを怖いとか変だとか思ったことはありません」

東京慈恵会医科大に進学し「病気を診ずして病人を診よ」という建学の精神のもと、精神科の教室で助手を務め大学院、昭和54年、高田に戻り、父の病院で診療を始める。そこで一つの思いがわき上がる。父は農耕療法で患者を日の当たる屋外にいざなった。「ならば次は、病院を出て地域で暮らせるのでは？」。56年、病院建て替えで出た古材を使い、退院促進に向け、軽度の患者らの共同住居を造った。グループホームという言葉もない時代だった。

さらに10年が過ぎ、次の段階を目指す。「社会で自立して生活するには働かないといけない。そのトレーニングの場が必要だ」と、平成4年、パンを焼いて販売する工房を開設。地域の親子を招いたパン作り教室も開き、偏見解消に努めた。住民との交流イベントも主催。物品販売や講演などを行う「越後はさま木フェスタ」は昨年で20回、地域住民が障害者らとともに走るマラソン大会は8回を数える。

座右の銘は「まあるい心で共ににっこり」。80歳の現在も現役を続行し、日々の診療の傍ら、5法人のグループの理事長も務め、スタッフは約1千人に及ぶ。「体がいくつあっても足りない」と屈託なく笑った。

（文・山本雅人、写真・酒巻俊介）

「自宅で最期を」患者の願い下支え

出水明氏（大阪府岸和田市）

でみず・あきら　出水クリニック院長。昭和27年、和歌山県湯浅町生まれ。74歳。61年、大阪大医学部卒業後、同大医学部附属病院麻酔科に入局。大阪警察病院を経て平成5年に喜多病院（当時）副院長に就任。8年に出水クリニックを開設。現在も在宅医療のため地域を回っている。

大阪府南部の城下町、岸和田市の昔ながらの街並みにたたずむ小さなクリニック。ペインクリニックとして、また自宅で最期を迎えたいと願う患者を支える開業医として歩んできた。在宅で自ら看取った患者は900人を超える。赤ひげ大賞の受賞に「日々悩みながらの在宅医療。支えてくれた訪問看護師さんらのおかげ」と話る。

自然が好きで、日本の山岳界に影響を与えた名門・山岳部に憧れ、京都大の工学部に入学。学園紛争の余波で「一度は大学を去ったものの、「人の役に立たい」と28歳で大阪大医学部の門をたたいた。

麻酔科医として最も興味を持ったのがペインクリニックだった。痛みの診断と治療、管理を行う専門科。しかし、勤務医時代は「自宅に帰りたい」というがん患者からの訴えを受けても、病院の態勢が整わず対応が難しかった。

そんな中、1人の乳がん患者の女性と出会った。絵を描くのが好きだった女性は、がんが転移しながらも自宅での最期を希望した。女性は訪問診療を受けながら、念願だった100号の絵を描き上げて数日後に自宅で息を引き取った。「家に出かけて生活の中で患者を診るのが大切だと改めて思った」

クリニックの院長になれば自らの判断で行動できると平成8年に開業。外来のペインクリニックをやりながら、自宅で闘病する患者に訪問診療を行うミックス型のクリニックで、住み慣れた家での最期の時間を穏やかに過ごしてもらうことが目的だった。「家に帰りたいという患者さんの願いを、ひたすらかなえるためです」という。

医師としての道は、自然と地域医療、在宅医療へと続いていった。約20年前には自ら発起人となり、地域のクリニックと連携ネットワークを立ち上げた。主治医が岸和田を離れた場合、他の医師が代わって患者を看取るシステムだ。地元医師会の担当役員として医療と介護の連携事業も進めた。「今後も患者とその家族のサポートをしていくのが役目」と語った。

（文・藤原由梨、写真・柿平博文）

「全身を診る」肝に銘じ故郷に腰据え

前川裕子氏（徳島県三好市）

まえがわ・ゆうこ　徳島県立三好病院循環器内科部長。昭和50年、徳島県井川町（現・三好市）生まれ。50歳。千葉大医学部卒業後、東京大附属病院などに勤務し、東日本大震災発生3カ月後の平成23年6月から岩手県立宮古病院で地域医療の復興に取り組む。令和5年10月から徳島県立三好病院に勤務。

「人の役に立つ仕事」を志した子供の頃から、思い描いてきたのは親身となって患者に寄り添う医師の姿だった。

四国のほぼ中央の山間部にある徳島県三好市で生まれ育った。東日本大震災の被災地で12年にわたり地域医療の復興に携わった後、故郷の県立三好病院に勤務するようになって2年余り。理想の医師像に向け、歩み続けている。

東京都内の病院で循環器内科医として勤務していた平成23年3月11日、津波の映像に目を見張った。「被災地へ行って何か手助けをしなければ…」。すぐにでも被災地に向かいたい思いをいったん封印し、今の自分にできることを考えた。

全国から駆け付けた医療チームも、いつまでも被災地にとどまるわけではない。ならば彼らが引き揚げ始める時期から、腰を据えて地域医療の復興に取り組む。それが自分の役割だと考え、6月に岩手県宮古市に移り住み、県立宮古病院で勤務を始めた。

当時、長引く避難生活で体調を崩す患者が多かった。だが、宮古病院の循環器科は高齢の常勤医が1人だけ。まずは心臓カテーテル検査やペースメーカーの埋め込みなどを行える体制を整えた。2年後からは常勤医も2人増えた。

だが退院しても、しばらくすると病状が悪化し、再入院する患者もいた。そこで訪問看護師やケアマネジャーら病院内外の多職種で連携して「心不全減らし隊」を立ち上げ、地域ぐるみで患者の体調を見守る取り組みを進めた。

30年ぶりに戻った故郷でも、患者とじっくり向き合う姿勢は変わらない。三好病院での勤務の傍ら、毎週水曜は準無医地区にある診療所に車で1時間半近くかけて通う。

病院での外来とは違い、患者の症状はさまざま。循環器内科では扱う機会がなかった関節注射もできるようになった。「専門分野にとらわれず、患者さんの全身を診ること、生活を知ることを肝に銘じています」

赤ひげ大賞の受賞には戸惑いもあった。「私よりもずっと長く地域のために取り組んできた方々がいらっしゃる。地域のかかりつけ医として、私はまだ道半ばです」とはにかんだ。

（文・福富正大、写真・土井繁孝）

太陽生命は、100歳時代の元気・長生きを応援しています。

「長生き人生」を安心して過ごすために、大切なのは「元気」。
病気の予防をサポートしながら、皆さまがますます健康になれるように。
太陽生命は、保険会社の新しい役割を担えるよう挑戦し続けます。

［資料のご請求・お問い合わせは］太陽生命お客様サービスセンター 0120-709-506（通話無料）
営業時間：月～金曜日 9時～18時／土曜日 9時～17時
※日曜日・祝日・年末年始（12/30～1/4）は休業します。
太陽生命ダイレクト
さあ、保険の新次元へ。T&D保険グループ